

ボバース記念病院 校内研修

— 絵カードを使った要求の表現方法の検討と絵カードの製作 —

本校訪問教育部

1 はじめに

ボバース記念病院に入院している児童生徒の訪問授業において、言語でコミュニケーションをとることが難しい児童生徒に対し、絵カードを活用することが多くある。例えば、授業の中で、「今日の天気は何か？」「今日の体調はどうか？」「何がしたいかな？」など、児童生徒が質問されたことに対して答えたり、自分の気持ちを伝えたりする場面で多く活用している。コミュニケーションをとる中で、絵カードの提示方法は適しているのか、選択肢の数はこれでよいのか、次の段階へ進むにはどうしたらよいかなど悩むことがある。

そこで今回、絵カードを使ったコミュニケーション指導について、ボバース記念病院リハビリテーション科の佐野麻子先生に講師として参加していただき、研修会を実施した。一つの事例を通して、コミュニケーションが可能になるための支援方法を検討、教材を製作するという形で研修を進めていった。

2 概要

日時	令和6年7月25日（木）15：00～16：45
場所	本校2階多目的ホール
講師	ボバース記念病院 リハビリテーション部 言語療法科 科長 佐野 麻子先生
対象	当校教員
テーマ	絵カードを使った要求の表現方法の検討と絵カードの製作

3 内容

（1）STって？

Speech Therapist（言語聴覚士）は「コミュニケーション」「食べる」「聞こえ」について訓練を行っている。コミュニケーションでは、「どちらの絵本を読みたい？」と選んだり、サイン（マカトン）やドロップトークを使っのやりとりを練習したりすることを行っている。食事では、身体をコントロールしながら少しずつ食べる練習や、味を楽しむ経験をするため布巾に包んだ食べ物を噛む練習などを行っている。



（2）事例検討—絵カードを使った要求の表現方法の検討と絵カードの製作—

児童の実態報告、学習の様子動画をもとに、「何がしたい？」と児童に聞いたとき、「リンゴジュースが飲みたい」と効率よく児童が伝えることができる方法について話し合い、教材製作を行った。教材製作後、どのようなねらいか、いつどこでどのように使うのか、完成したらどのような形になるのかなどを中心に各グループ発表を行った。講師講評では、「選択する材料として、写真、イラスト、イラストと文字を合わせたものなど、児童の発達段階にあわせて、どのような手段を使用したらよいかとを考えることが大切である。また、選択肢の数については、目



II 校内研修

でどれくらい探索できるか、注意が向かない児童生徒にとってどのような数が適しているかを考える必要がある」などのアドバイスをいただいた。

(3) 質疑応答

- ・(事前アンケートより)内言語はあるが、ことばを介したコミュニケーションが難しく、ボディランゲージで意思を伝えようとする子どもへの発展的取組み、発声へとつながる取組みについて教えてください。
→「ことば」を出すためには「声に出すことば(音声言語)」、「分かることば」、「コミュニケーション意欲」が必要になる。発語できることばは、本人が知っていることばのほんの一部であり、分かることばがたくさん増えてきて、発語できることばが増えてくることが大前提である。「表出ができていない理由は何か?」というのを考え、取組みの中で、声を出しやすい条件づくりをすることが大切である。発声はできるが表出がない場合については、「わかることばが少ないのかな?」「コミュニケーション意欲が乏しいのかな?」などの視点から、子どものことばを真似る、気持ちを言語化する、相手のことばを補って拡充する、などの取組みが考えられる。また、AAC(拡大・代替コミュニケーション)選択のポイントとして、複数併用してもよいこと、発達状況や環境、ライフステージなどによって手段は変化していくこと、今すぐ使える手段、もしくは少しだけ練習して使える手段であることが大切である。
- ・(事前アンケートより)重複障がい児の児童・生徒のコミュニケーションについて基本的な考え方を教えてください。
→脳性麻痺における重複障害は、感覚運動障害や知的障害など様々な障害を抱えている。表現が難しい、体験することが難しい、認知面の問題、気持ちが伝わりにくいなどの悪循環がコミュニケーションの意欲の低下につながりやすい。また、子どもの反応が弱く偏っていると、養育者が子どもの反応を受け取りにくく、子どもへの働きかけが少なくなり、母子関係が築きにくいということもある。(事例を動画で視聴して)布巾に包まれたドライマンゴーを口に含む練習をした時、始めは嫌そうにしていたけれど、目の動きから少しずつ変化している様子が分かる。このように、言葉かけでは難しい場合でも、味覚・においなどは感じやすいことのひとつである。できることから働きかけていくことが大切である。
- ・AACとしてアナログかデジタル、どちらがよいのか。
→視覚的に難しい児童が多いので、アナログから始めることが多い。アナログから始めて、ハイテクに落とし込んでいくことが多い。
- ・写真からイラストへの移行基準について。
→写真からイラストへ変更したとき、同じ反応を得ることができた時に次の段階へ進めていく。リンゴの写真カードとイラストのカードのマッチングができるなど。

4 まとめ

授業の中で、児童生徒とコミュニケーションをとりながら進めていくことは必要なことである。今回、佐野先生から専門的なお話を聞かせていただくとともに、事例を通して教材を製作しご意見をいただくという機会を持つことができた。今回で得た知識を生かし、子どもたちがやってみたいと思える授業を実践していきたい。